氏　　名	菅﨑　香乃
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　　８８９４　　号
学位授与年月日	平成　３１年　３月　２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	ウィトゲンシュタイン「心理学の哲学」の研究 ―『哲学探究』第 II 部の主題と構造の解明へ向けた手稿群の系譜的分析―

主　　査	筑波大学　教　授	Ph.D.	鬼界彰夫
副　　査	筑波大学　教　授	博士（文学）	檜垣良成
副　　査	筑波大学　准教授	博士（文学）	橋本康二
副　　査	筑波大学　准教授	博士（人文科学）	横山幹子

論　文　の　要　旨

本論はウィトゲンシュタイン『哲学探究』第 II 部の主題と構造を、その最終的な執筆に先立って書かれた準備的な手稿(MSS130-137)とタイプ原稿(MS229,232)の内在的な分析を通じて明らかにしようとするものである。『哲学探究』第 II 部はウィトゲンシュタイン第二の主著である『哲学探究』第 I 部と並んで多くの関心を集めてきた書物であり、とりわけ「アスペクト」と「として見る」に関する議論は科学哲学をはじめとする多方面の研究者から多様な関心を集めてきたが、興味深いそれらの議論が何のためになされ、書物全体がどんな目的を持っているのかが不明瞭であるため、研究者の間では全体の目的に関して、心理学的諸概念の体系的分析を目的とする（I)、哲学的問題・混乱の解決・解消を目的とする(II)、そのどちらも目的とする（III)、という相対立する見解が存在してきた。本論は、同氏が「準備稿」と名付ける、『哲学探究』第 II 部の執筆に先立つ約二年半の間に書かれた 7 冊の手稿ノートと二組のタイプ原稿（それらは『心理学の哲学１，２』として後に出版された）を、新しい分析方法を用いて体系的に主題ごとの思考の変遷・進化に即して分析し、それによって『哲学探究』第 II 部全体の主題と構造はどのようなものかという重大な問いに、より確定的な答えを与えることを目的とする。本論は三部より成り、第一部（第一章―第三章）では論文の主題と方法が示され、第二部（第四章―第九章）では準備稿におけるウィトゲンシュタインの思考の運動が時間系列に沿って分析され、その中での主題の形成、各主題を巡る思考の変遷、主題間の相互関係が明らかにされる。第三部（第十章―結論）では、準備稿で形成された諸主題とそれらに関する考察が、『探究』第 II 部全十四章の叙述にどのように反映されているかを明らかにすることを通じて、表面的には見えにくいそれらの章間の主題的なつながりと、全体的な思考の大きな流れが明らかにされ、『探究』第 II 部全体の目的を巡る論争に対して菅﨑氏固有の見解と根拠が示される。

「第一章　心理学の哲学テキスト群の概要」では『哲学探究』第 II 部に関連するテキスト群の全体像が示

され、それらが「準備稿」、「二次手稿」、「『探究』第 II 部本文」に分類されるとともに、第 II 部各章で扱われる主題の概要が分析に先立って示される。「第二章　心理学の哲学テキスト群に関する研究の状況」では上述の第 II 部の解釈を巡る三つの見解が示され、本論が（III）の立場に立つものであることが明言される。「第三章　本研究の方法論」では、本論のウィトゲンシュタインのテキスト分析が 1990 年代後半に鬼界彰夫（筑波大学）によって確立された「スレッドーシークエンス法」を用いて進められることが述べられるとともに、スレッド（思考主題）、シークエンス（一体性を持つ連続した思考運動の最小単位）、ムーヴメント（一貫し完結した思考運動の最小単位）という基本概念が説明される。「第四章　ムーヴメントの分割と全体の流れ」では準備稿が MI から MIV までの四つのムーヴメントに分割され、ムーヴメント毎に以下の分析が進められることが示される。「第五章　MI(MS130 中盤)の分析」では、MI が準備稿で扱われる主題(スレッド)が提示される場であることとが示され、そこに登場する「音楽の理解」、「多義語」、「意味感覚」、「アスペクトを見る」、「概念形成」という五つの主題が紹介される。本論の一つの核心である「第六章　MII(MSS130 後半～131 終盤)の分析」は、MII で「ある言葉(「はし」などの多義語)をある意味で聞く」という「意味体験」の現象が扱われ、様々な哲学的考察を通じて、この表現に関して心の状態について考えるのは「こころ」について我々が持つ原初的な像を誤解し、哲学的誤解を生みだすことであり、そうした像とそれを巡る表現が何のためにどのように使用されるのかを考えるという新しい思考法によってのみそうした哲学的誤解は解消されることが示されていることが明らかにされる。「第七章　MIII(MSS131 終盤～135 前半)の分析」では、MIII において、同じ図形が、例えば、ウサギに見えたり、アヒルに見えたりするという「アスペクトを見る」という主題が導入され、色や形を見るという意味での「見る」と、ある図形をウサギとして見るという意味での「見る」という二種の「見る」概念が導入され、それらの差異と関係を巡る哲学的問題が提示されることが示され、『探究』第 II 部の最も大きな主題の源がここにあることが明らかにされるとともに、同じく MIII において様々な心的概念が、意識状態（見る、感じる、など）、傾性（信じる、など）、行為（想像する、考える、など）に分類され、それらの相互関係が綿密に考察されていることが示され、『探究』第 II 部における「として見る」の分析に用いられている心的概念の系統的分類がここに源を持つことも明らかにされる。「第八章　MIV(MS135 後半～137 前半)の分析」では、MIII で提示されたアスペクトと二種の「見る」に関する問題に関して MIV でさらに詳細で多角的な考察が進められることと、にもかかわらず二つの「見る」の概念の区別は不十分で、「アスペクトを見る」に関する準備稿の考察は未だ不十分なものにとどまっていたことが明らかにされる。「第九章　総括―準備稿において何が達成されたのか」では第四章以降の分析が総括され、『探究』第 II 部に向けて準備稿において達成されたのが、心的諸概念に関する哲学的混乱が「こころ」を巡る像の誤解に基づいた考察に起因し、その混乱は像とそれを巡る表現の使用法の考察によってのみ解消されることを示したことだとされ、他方二つの「見る」の相違の更なる明確化と、「アスペクトを見る」に関する考察がどのような哲学的混乱に関わるものなのかを明らかにすることが課題として残されたことが示される。「第十章　二次手稿の展開」では『探究』第 II 部の下書きである二次手稿の分析を通じて、準備稿で達成されたことを土台とし、その不十分さをどのように補うことによって『探究』第 II 部が形成されていったのかが明らかにされ、「意味体験」と「アスペクト体験」の関連性と、「として見る」という概念の更なる考察がその核心であることが示される。「第十一章　『探究』第 II 部の構成と目的」では、『探究』第 II 部の十四の章の主題とその相互関係、および準備稿との関連が整理され、その全体が「アスペクトを見ること」という主題を中心とした有意味な構造連関を持つことが示されるとともに、全体の目的が、心的概念を巡る哲学的混乱は、像の誤解に基づいた説明から、像の使用法に関する考察へと転換することによってのみ解消されることを示すことだと結論付けられる。「結論　準備稿の系譜的分析は『探究』第 II 部の解明に資するか」では、『探究』第 II 部の目的に関する諸解釈中の（I）が以上の考察に基づき排除されるとともに、第 II 部の「アスペクトを見る」に関する考察が「も

のの見方を変える」というウィトゲンシュタイン固有の哲学的方法にかかわるものであり、『探究』第 II 部の目的が哲学的混乱の解消のみに限定できないものであるがゆえに（II）も不十分であり、（III）が最も妥当であると結論付けられる。

審　査　の　要　旨

１　批評

菅﨑氏の本論文は、現代哲学にとって最も重要な哲学者の一人と広く認められるＬ．ウィトゲンシュタインの思想の全貌を解明し、そのより深い理解を得るのに大きく貢献する、重要な意味を持つ独創的な哲学研究であると判断される。すなわち本論文は、ウィトゲンシュタインの諸著作の中でも、主著『哲学探究』第Ｉ部に劣らぬ重要性を持ち、トマス・クーンらによる 20 世紀後半の科学観の大転換の源泉となった『哲学探究』第 II 部に対して、それに先立つ準備稿を系統的に分析し、その結果を『探究』第 II 部の議論の分析と綿密に照合することにより、これまでは極めて興味深い内容に満ちていると広く認められながらも、その全体のつながりと目的が全く不明であった同書が緊密な全体の主題構造と明確な目的を持つものであることを実証的裏付けをもって説得的に示すことに成功していると判断される。膨大な準備稿を系統的かつ綿密に分析するというこれまで試みられたことのない困難な作業に基づき、表面上は隠れている『探究』第 II 部の議論の筋道を明らかにし、これまで多様で相互に孤立しているかに見えた同書各章の内容に深く重要なつながりがあることを解明したことに本研究の最も大きな独創性が見られる。とりわけ同書の二つの大きな主題である「意味体験」と「として見る」を巡る議論において、準備稿で確立された「像による説明から、像と表現の使用法の考察への転換」という根本的方法が同書で駆使されていることと、同書の「として見る」を「見る」と「考える」の結合とする分析の背後に、心的諸概念に関する準備稿の系統的分類と考察が存在していたことは、『探究』第 II 部のテキストからは推測することすら困難であり、菅﨑氏の研究により初めてもたらされた興味深く重要な知見であり、『哲学探究』第 II 部に関する我々の理解を大きく前進させるものである。

他方、こうした豊富な研究成果を一つの結論へと定式化することに関連して、本論の叙述に問題が無い訳ではない。本論は第十一章で、『探究』第 II 部の目的を、心的概念に関する哲学的混乱が像による説明から、像と表現の使用に関する考察へと転換することによってのみ解消されるということを示すことであるとしながら、結論では、ものの見方（アスペクト）を変えるという彼の哲学の方法に関する考察も同書の重要な内容であると述べているが、両者の関係を明らかにしておらず、同書の目的は何かという問いに対しては曖昧さの残る答えを示すに止まっている。いわば本論の結論の叙述は、本論の成果の豊かさに追いついておらず、今後これら両者の関係を明確にし、本論の持つ重要な潜在的内容をより明確にするような研究を菅﨑氏には望みたい。

２　最終試験

平成 31 年 2 月 14 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。